

## プラグマティズムの旧左翼、ポピュリズムで抵抗する保守

ハンガリーは今、医療改革の真つ只中。I 回三〇〇 F t の診察料の導入の混乱が一段落し、現在は国立病院の統廃合が進められている。野党の F I D E S Z ・K D N P 連合は厳しく政府を批判し、週末毎に廃止予定病院への「人間の鎖」デモを組織し抵抗している。F I D E S Z 政権時代の厚生大臣ミコラは、政府の医療改革は数ヶ月で十数年分の変更を断行するもので、言語道断と批判する。

F I D E S Z ・K D N P 連合は政府の施策にたいしてことごとく反対し、授業料導入撤廃、診察料撤廃、病院統廃合中止、病院民営化中止、学校統廃合中止等々、すべての変革を拒否し、これを国民投票にかけ政府打倒を目指している。

いったい何が問題の本質なのか。もう一度、頭を冷やして考えてみる必要があるだろう。医療と学校教育の改革は体制転換以降、ほとんど手が付けられていない分野で問題が山積している。そのことは誰も否定できない。今の医療体制に満足している人はいない。それでは何をどう変えたら良いのだろうか。野党はこれらの分野にお金を注がないことが問題だというのが、そうではないだろう。システムそのものに問題があると考えるべきだ。野党は具体的な改革を示さずとなく、現存システムの保持を主張しているように見える。しかし、現存システムは旧社会主義下で機能したシステムなのだ。

### 医師自主管理・医師主権

ハンガリーで行きたくない場所を列挙すると、入国管理事務所、税務署、税関、警察署、病院などが続く。特別な用がない限り、こ免被りたい施設である。どうしても、役所の都合が優先して、利用者の便宜を顧みないシステムが機能しているからだ。ここには旧体制の役人主権、生産者主権が支配している。

ハンガリーでは居住地区ごとに診療所があり、通常の診察はこのクリニックで受ける。そこで施せない治療は担当医師がいわば「送り状」を添えて、患者を病院へ回す仕組みになっている。もちろん、症状が重ければ、最初から大病院に行くことも可能だが、その場合には当該病院の医師の紹介(コネ)がないと事は簡単に済まない。

さて、その診療所だが、ほとんど診療所には患者受付窓口がない。担当医師の部屋の前に患者が集まり、お互いに順番を確認し合つて、声がかかるのを待つ。いったい医師が部屋にいるかどうか不確かだが、ドアをノックしようものな、静かに廊下で待つてなさいと看護婦が叱るのが落ちだ。もう一つ、看護婦も何時になったら医師が来るのかわからないのだが、(E U 加盟が実現してから、居住地区の区役所のサウイスは番号札で順番待ちする文明的な方法になったが、他はまだ昔ながらの窓口なしのシステムが機能している)。

ここでもキャプテン主権ならぬ、医師主権(医者への威を借りた看護婦主権)が支配している。医者が何時に診療所に来ようが、それは医者が決めること。八時から診療が始まると書いてあつても、まず実入りの良い個別患者の往診を優先するために、九時になったり一〇時になったりする。それが日常茶飯のことだから、患者も文句を言わずに、我慢強く医者を待つ。体制転換以後も、この昔のままのシス

### アエロフロートの事例：キャプテン主権

以前にもこのコラムで紹介したが、アエロフロート(連航空)での経験は社会主義下の生産者主権原理を如実に示すものとして分かりやすいので、もう一度紹介しよう。

今こそ、各航空会社は安売りチケットを販売しているがほんの少し前までは日本から欧州行き格安チケットはアエロフロートと決まっていた。要するに、「安かろう、悪かろう」である。飛行機内で受けるサーヴィスには限界があるから、自腹の渡航に何万円も多く出して高い飛行機に乗る必要はないと考えていた。だから、欧州行きはアエロフロートと決まっていた。

今はどうなっているのか知らないが一九八〇年代のアエロフロート・モスクワ行き成田出発は三時。この時間帯に成田を飛び飛行機は、安定飛行に入ると乗客に昼食を出す。ところがアエロフロートでは腹を空かした乗客の注視の中、スチュワーデスがまずパイロット室に食事を運ぶ。パイロットが乗客の命を握っている訳だから、それを批判しようとは思わない。それから乗客へのサーヴィスが始まっても我慢しよう。海の航海でも、まず船長に食事を出すようだから、これが航海や航行の礼儀と割り切ることもできる。何もカネを出している乗客が偉い訳でもないだろうから、ところが、パイロットへの食事サーヴィスが終わると、スチュ

テムで動いている。

とにかく、ハンガリーの診療所には患者を受け付けるというシステムが存在しない。これはハンガリーに初めて来た一九七〇年代からまったく変わっていない。手の空いている看護婦がそれをやれば良いのだが、医者も看護婦もその必要性を感じないだろう。これで何十年もやってきたのだから。だから、急に診療費三〇〇F を徴取すると言うと、どうやってそれを事務処理して良いのかわからないのだ。これを契機に、診療所全体のシステムを変え、患者の受付と診療費受払の窓口を開けばよいのだが、そういう簡単なことも思い浮かばないらしく、診療費導入に国中が右往左往している。

ところで、病院はどうか。この大病院も、立派な建物や広い敷地をもっているが、設置されている設備や病室は古ぼけている。入院患者を抱えている大病院はそれなりのシステムで動いているから診療所とは違うが、外来患者の受付のシステムは診療所とあまり変わらない。だから大病院へ行くときは、医者のコネを探して、便宜を図ってもらわないと、とんでもないことになる。何時間待つても診察を受けられないことが珍しくない。要するに、大病院でも患者不在の医師主権が支配している。

逆に見ると、医師主権の矛盾は大病院になるほど大きい。大病院こそ、医師集団から独立した経営主体が必要なのだが、国立病院では医師組織が経営主体も兼ねている。病院は医者の自主管理体制に置かれていると言ってもよい。しかし、ユーゴスラビアの自主管理社会主義が破綻したように、医者の自主管理もつく経営責任不在の病院経営はとつくの昔に破綻している。にもかかわらず、旧態依然としたシステムが残存している。それが「安かろう、悪かろう」の医療サーヴィスの現状を生み出している。これが問題の本質だ。

### プラグマティズム

これにたいして社会党はどうか。政府の医療改革は与党社会党が事の本質を理解し、それを改革しようとして始めたものではない。今時の医療改革は S Z D S Z が主導したものだ。S Z D S Z には病院民営化と医療保険の複線化という明確な政策がある。民営化を私的資本に委ねることだけを意味するのであれば視野は狭いと言えるが、広義の意味で、医師の自主管理から、責任ある経営主体による病院経営への転換と捉えれば、この政策は正しいだろう。

他方、社会党は S Z D S Z が主導する医療改革を恐る恐る見守っている。S Z D S Z の政策だけが突っ走つて国民の反感を買ひ、それが社会党の支持率に跳ね返ってくるのは困る。それが社会党議員の一番の心配だろう。社会党議員の多くは医療改革の理念をもっていない。彼らを動かしているのは、旧体制からハンガリーの政治の底流に存在しているプラグマティズムである。良く言えば「変革への柔軟性」だが、悪く言えば「日和見主義」。要するに定見がない。社会党と言つても社会主義を標榜する訳でもなし、かといつて資本主義を賛美する訳にもいかないが、事の成り行き上、資本主義的施策の推進を担うという立場だ。

そのことはガス料金補助制度の運用に如実に現れている。百万世帯を対象にした個別のガス料金減免申請システムなど、ポピュリスト政策以外の何物でもない。ここではプラグマティズムとポピュリズムが一体化している。百万人の人々が費やす時間、それを処理する事務時間と労働時間、人件費を考えれば、他にいくらかでも方法がある。これほどの社会的無駄はない。にもかかわらず、一番コストのかかる方法で、ガス料金補助を行うのは、「施し」政策が目に見えるからだ。世帯毎に個別の価格補助政策を展開したのでは、国家予算のスリム化など夢の夢である。

ワデスは免税品の販売を始めるのだ。それが終わるまで、しばらく乗客は昼食にありつけない。漸く乗客へのサーヴィが始まるのは午後三時を過ぎてからだ。これには参つた。こまかくると、主客転倒も甚だしい。

モスクワで泊するトランジットの場合も、信じられないような出来事に遭遇する。空港の隣にあるトランジット「ホテル」(学生寮程度の施設へ勝手に入つてはならない。担当者が決められた乗客を集めるまで、ロビーで待つ。当時の空港レストランは食事時間になると、テーブルに食べ物と飲み物を配る施設で、それ以外の時間帯は手が空いていても乗客へのサーヴィスは行わない。テーブルに座ると、台所のドア越しに従業員がじろじろ見るだけで、ウンともスンとも言つてこない)。

漸く人数がまとまり、バスに乗せられトランジット「ホテル」に着くと、今度は向こうの都合で勝手に部屋割りが表示される。個室使用はなく、見知らぬ人と組み合わせられて、二人セットで部屋が割り当てられる。「ホテル」の部屋に風呂はあるが、冬でもお湯が出ることは稀である。翌朝九時過ぎの飛行機便でも、「ホテル」の各階を担当しているおばさんたちが、午前五時頃にドアを叩いて起こしに来る。空港まで二 km もない宿舎だが、いろいろな所へ行く旅行者をまとめてバス輸送するから、出発時間に関係なくたたき起こされる。玄関に乗客が集められ、長い時間、玄関でバスが来るのを待つ。漸く空港のチェックインが終わり、「食事配給レストラン」で紅茶にありつけた時に、ほつと息づいてしなだ。

いったいこのシステムは何なのだろうか。明らかに余分な仕事をしない従業員主権、生産者主権(パイロット主権、キャプテン主権)がだ。彼らの都合にすべてを合わせ、ている。利用者(顧客)や消費者の都合は二の次なのだ。

ブダペスト市二区のヒューヴォシュヴルジ通りに、国立の精神病院がある。百数十のベッド数を抱える病院だが、膨大な敷地に宮殿かと見間違ふような立派な建物があり、林の奥に垣間見える。今、政府はこの病院を廃止し、不動産を売却しようとしているが、野党と区長はこれに激しく抵抗している。病院の中を見たことはないが、医療施設としての高い質の設備を備え、良質のサーヴィスを提供しているはずはない。この広大な敷地に満杯の患者を抱えているとも思えない。しかし、この病院の医師たちから病院を移転して、小規模でも新しい施設を備えた病院に作り替えたいという提案が出たとも聞かない。そういう経営的な意思決定を行う主体が存在しないのだ。

このような状態であれば、政府がこの高価な不動産を民間デブエロツパーに売ると決定しても文句は言えない。その売却額の何分のかの資金で郊外にコンパクトな病院を作ればよい。ただし、経営主体を明確にして、それが時代の要請というものだろう。そういう対案を提示できない野党は無力だ。

### ポピュリズムとボルシェヴィズム

政府のあらゆる改革に反対し、現状システムの擁護を訴える F I D E S Z ・K D N P は現状の変更を嫌う保守的な国民層の感情に依拠している。確かに、統廃合は就業者の切り捨てを伴うし、残つた就業者にも新しいシステムの習得という負荷がかかる。現状維持のまま、定年まで人生を過ごせば良いというのが、小市民的な感覚だろう。しかし、それでは高い質のサーヴィスを提供したり、新しい時代の要請に応えたりすることはできない。日常的に切磋琢磨して職場を改善するとう意識が定着しなければ、本当の変化は起きない。しかし、このような方向への変

化はこれまでぬるま湯的な環境に馴染んできた就業者に苦痛だろう。F I D E S Z ・K D N P の現状維持政策は、こうした小市民的で遅れた保守意識にとつぷり依存したものだ。まさに旧体制のぬるま湯に浸かつた意識をそのまま温存する政策なのだ。

この事例のように、野党が展開するポピュリズムは現状の変更を恐れ嫌う意識に依存している点で、後ろ向きの方策だ。反コミュニティを標榜する F I D E S Z が、旧社会主義から存続してきたシステムの温存を謳うというのは自己矛盾である。

しかも、興味深いことに、この反コミュニティのイデオロギー闘争を唱える党が、ボルシェヴィズムにもつとも近い党組織を維持している。党首オルバンの個人崇拜を軸に、オルバン反対者をあぶり出したり、党から追放したりするというのは、まさにソ連型共産党のモデルそのものではないか。社会党を含め他の政党では、体制転換以後、党首が何度も交代しているが、F I D E S Z だけは貫してオルバンが頂点にたつたままである。

まさに、ポーランドのミックニックが指摘したように、「ポピュリズムの核心は変化への恐れと自由からの逃避であり、旧体制へのノスタルジーやボルシェヴィズムの顔をもつ(反)コミュニティを纏つた」(New York Times, March 25, 2007)。F I D E S Z にびつたり当つ嵌まるだろう。さらに、この指摘に関連して興味深いのは、郵政民営化で展開された小泉ポピュリズムである。オルバンとは反対に、現状改革の反対派を悪者に仕立てて世論の支持を得て、強面のボルシェヴィズムで反対者を切り捨てた。郵政民営化はまさに「大山鳴動してねずみ一匹」のポピュリズムだが、強面のボルシェヴィズムの顔をもつという点で、ミックニックの指摘はあつたっている。

### カーダール主義

ジュルチャーニが社会党党首に選出され、社会党本部の移転を決断した。いろいろな歴史的事件に遭遇してきた共和国広場の本部から出ることが、旧カーダール時代との最終的な決別を意味すると考えているようだ。それによつて、ホルン党首はカーダールこそが社会民主主義者であり、その伝統を守るべきと本部移転を批判している。

果たして、カーダール時代は社会民主主義だったのか。確かに、プラグマティズムとポピュリズムを内包するシステムだったが、基本的にソ連型社会主義の枠組みをでるものではなかった。それは党組織においても、また経済組織においても言えることである。指令経済方式を廃止したとは言え、ハンガリーはけつして私的競争にもとづく市場経済に転化することはなかった。また、党組織はソ連型組織そのものであり、複数政党制による民主主義は生まれなかった。

これにたいして、西欧の社会民主主義は市場経済をベースに、民主主義政治制度に立つて、福祉国家的枠組みを構築するものである。ソ連圏の中では社会民主主義に近い存在であつたと言えるが、それはあくまでアナロジイのこと。結局、カーダールのハンガリーはソ連型の枠組みを超えることはできなかった。それがカーダール体制の限界でもあつた。

ただ、カーダールの政策は、ある種の「施し主義」と現状改革のプラグマティズムを内包していた事は事実だ。その社会的行動慣性が F I D E S Z のポピュリズムと社会党のプラグマティズムとして継承されているとも言える。カーダールは急激な改革は必ず失敗すると確信していた。しかし、ソ連型社会主義の枠内での改革は絶対的な限界があるものだった。すでに破綻したシステムを漸次的に改革することなどできない。多くの痛みを伴つた改革なしに、「二世紀の医療体制をハンガリーに構築することはできないだろう。